

信高ライブラリー☆ナビ 12月号

信楽高等学校図書館 2021年12月3日 発行

皆さんいかがお過ごしでしょうか。考査期間が終わりほっと一息ついている人、テスト返しの恐怖に震えている人、すでに冬休みモードに入りつつある人などいろいろだと思いますが、ながくなった放課後のひと時、読書をしながら過ごしてみるのはどうでしょうか。また、本日から来週の金曜日まで、図書室では本校生徒の作った絵本を展示しています。興味のある人はぜひ見に来てください。



『人類やいなおし装置』

岡田淳著 17出版

たいへんな装置を作り出してしまったらしい。

“「できる。わしの頭脳をもってすれば、できる。すでに基本的な原理は思いついておる」”



『ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい』

大前粟生著 河出書房新社

A「あなたはクマですか？」

B「いいえ、クマのぬいぐるみです」

“僕もみんなみたいに恋愛を楽しめたらいいのに。大学2年生の七森は“男らしさ”“女らしさ”のノリが苦手。こわがらせず、侵害せず、誰かと繋がれるのかな？”



『解説がくわしいスペイン語の作文』

山村ひろみ著 白水社

これで、スペイン語の作文ができるようになる。

“Aunque llueve mucho, voy a ir a la playa.”



『5分後に美味しいラスト』

エプリスタ編 河出書房新社

カレーはおいしければおいしいほど、口内をやケドする確率が高くなる。

“タレや脂が飛ぶ恐れがあるので紙エプロンは絶対に装着しなければならない。よく考えてみろよ。

戦場に行き、防弾チョッキをダサイから、めんどうくさいからという理由で装着しない兵士がいるか？”



『明るい夜に出かけて』

佐藤多佳子著 新潮社

“富山は、ある事件がもとで心を閉ざし、大学を休学して海の側の街でコンビニバイトをしながら一人暮らしを始めた。夜の中でさまよう若者たちの孤独と繋がりを暖かく描いた青春小説の傑作。”



『歩道橋の魔術師』

呉明益著 白水社

喪失の悲しみに浸る幸せのことを、人はノスタルジーと言うのかもしれない。

“唐さんがふいに、猫に訊いた。「どう思う？」ドキンと鼓動が突き上げた。だって、猫の顔が、本当にその質問に答えようとしていたから。そして猫は本当に答えた。…なんてことはもちろんなく、猫はただ、ミャーと鳴いた。”